



レヴィゾン ウッド：ポッドキャスト - TD280220 v2

Charlie Mayhew:

さて、Tusk(タスク)のアンバサダーのレヴィゾン ウッドさんをお迎えしています。本日はお話しただけのことを、大変嬉しく思います。

Levison Wood:

こちらこそ、お招きいただきありがとうございます。

Charlie Mayhew:

さて、早速お話を伺いたと思います。自然保護へ関心を持つようになったのは、どのようなことがきっかけだったのでしょうか？

Levison Wood:

僕は子供の頃からずっと野生の動物が大好きでした。多くの若者たちと同じように、デイビッド アッテンボローなどの偉大な自然保護活動家から影響を受けたのだと思います。

10歳の頃、父に連れられて今は亡きデイビッド シェファードの美術展に行きました。10歳の子供でしたが、アフリカゾウの素晴らしい絵の数々に圧倒されたのを覚えています。美術展にはシェファード本人も来ており、話すことができました。

彼はアーティストとして経験してきた苦勞を話してくれました。それは、今も僕の原動力になっています。彼は、最初はあまり絵が上手くなかったと言っていましたが、見事なキャリアを築き上げたのです。



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

Charlie Mayhew:

私も彼から刺激を受けました。

Levison Wood:

僕はそのときまだ10歳の子供でしたが、こう思いました。「わあ、この人はゾウの絵を描いてアフリカ中を旅しているんだ。なんて素晴らしい人生なんだ」ってね。

それで、そこから多くのことを持ち帰りました。家に帰って自分でゾウの絵を描いてみたりもしました。絵はあまり上手くありませんでしたが、色々なことが繋がって、この頃から自然保護に強い関心を持つようになりました。

それから両親にさんざん頼み込んだと思います。「アフリカに行ってみたい、お願いします」って。

すごくラッキーだったのは、13か14の頃だったと思いますが、家族旅行で初めてケニアを訪れ、サファリに行くことができたことです。本当に素晴らしい、魔法のような時間でした。それからアフリカへは何度も行くようになり、東アフリカや南アフリカを旅して回りました。

僕にとっての大きなチャンスは、2013年の「ウォーキング・ザ・ナイル」遠征でした。僕たちが知り合ったのもその時でしたね。僕は、あの遠征に慈善活動の観点を持たせたいと思っていました。自然保護の要素を含めるのは当然じゃないかって。僕たちが話をするようになったのはその頃でしたね？

Charlie Mayhew:

そうですね。ええ、素晴らしいのは…、ナイル川の水源は、厳密にどこが水源なのかという議論がありますが、基本的にはウガンダにあるとされています。我々はそのウガンダで多くのプロジェクトを運営しています。そのため、レヴィンソンさんが加わったのは自然な流れでした。

Levison Wood:

ええ、本当にそうですね。様々なプロジェクトを現場で見ることができて良かったです。ルワンダでは野生のチンパンジーを見に行きましたし、ウガンダでは風が強くて奥まで見通すことので



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

きない森へ行き、そこでゴリラの生態を見ました。また、マーチソン フォールズなどでは、活動中のレンジャーたちに会いました。素晴らしいのは、Tuskの活動が密猟などのネガティブな面ばかりにフォーカスするのではなく、地域社会の関係性がいかに改善できるのかという点や、野生生物の違法取引と闘うために、また地域の人々がその闘いの中で役割を果たすために、教育がいかに重要であるかという点にも目を向けていることです。

Charlie Mayhew:

「ウォーキング・ザ・ナイル」の遠征中に、野生生物と共に生きるコミュニティやマーチソン国立公園などが直面する問題を実際に目にすることができたのではないのでしょうか。多くの人々が極度の貧困状態にあるという問題だけでなく、野生生物の密猟や違法取引という誘惑がいかに簡単に屈してしまうかという問題があります。

Levison Wood:

そうですね。村が国立公園や原生地帯に隣接している地域では、あなたのおっしゃるとおり、極度の貧困が存在します。彼らにも、もちろん家族を養いたいという思いがあるため、誘惑が生まれます。これは必然と言えるでしょう。

そのため、極めて重要なのは、地域の人々が野生生物の恩恵を理解することです。これはTuskの活動の重要な部分でもありませんが、野生生物がいかに価値あるものなのか、金銭的な価値だけでなく、長期的な側面においてもそれを示すことが重要であると考えています。

もしこの象徴的な種を失うなら、もしゾウやサイがいなくなるなら、経済に多大な悪影響が長期的に生じることになりますから。

Charlie Mayhew:

Tuskのアンバサダーになることを快く受け入れてくださったのは、そういった理由からですか？

Levison Wood:

はい、マーチソン国立公園などの場所を歩いて、レンジャーたちの素晴らしい活動を見ました。レンジャーたちの輸送用コンテナは罌や槍でいっぱい、それを見て大変驚きました。公園の中を



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

歩いていると、畏にかかった様々な野生動物の死骸がありました。その姿は本当に痛ましく、何らかの手を打たなければならぬと思いました。

地域の人々の協力が無い限り、この戦いに勝ち目はありません。若いリーダーの活躍支援や自然擁護者の育成など、Tuskが展開する取組みは地域社会の中で大変素晴らしい模範を示しています。さもなければ、その目的がブッシュミートであれ、象牙であれ、あるいは野生生物の売買であれ、密猟で金を稼ごうという誘惑に襲われます。人々がそのような行為に手を染める理由はたくさんあるんです。しかし、基本的な要因は機会の欠如なのだと思います。機会を創出し、野生生物が存在する意味について異なった考え方を植え付けることが重要だと思います。

Charlie Mayhew:

あなたに聞きたいことがあります。2013年に「ウォーキング・ザ・ナイル」遠征を行った際、マーチソン国立公園などを歩いたときに、怖いと感じることはありませんでしたか？レンジャーの護衛がついていたのですか？

Levison Wood:

ええ、レンジャーはいました。僕たちは小さな護衛隊を連れていなければなりません。これは安全上の理由から当然のことです。最初は4人くらいいたと思いますが、そのうちの2人は、まあ最終的には歩くのが好きではなかったみたいです。なので、順番に交代しながらですね。ええ、彼らは本当に素晴らしいレンジャーでした。非常にユーモアもありましたし。

それで、公園を歩いて通るのに7日か8日くらいかかったと思います。

Charlie Mayhew:

えっ、そんなにかかったのですか…



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

Levison Wood:

ええ、移動するのが大変な地形で、密集した低木林が点在するためです。川沿いを歩いていこうと決めて、僕はそうしようとしたのですが、時々非常に密集した低木林に行き当たるので、難しい選択を迫られるんです。通り抜けるだけでも大変なのに、バッファローなど、出くわしたくない大型動物がいる場合もあるからです。

一方で、非常に幅の狭い砂浜は無駄なく歩けます。しかし、ワニやカバがいるときは、十分注意しなければなりません。片方に1匹のカバ、そして前方に7、8匹のワニに囲まれたことも何度かありました。

こういった選択を迫られることはよくあります。結局、ワニの方へ走りました。これは少し直観に反しますが、カバよりもワニの方に望みがあると考えたからです。

けれど、楽しかったですよ。長い探検でした、9か月、6か国にわたって様々な国立公園を訪れました。

結局、実際に歩いていても、広大な大地が果てしなく続いているだけで何も起きません。なので、国立公園の中にいるときは結構面白いですよ。そういった特別な刺激もあるので、本当に生きている心地がします。死にたいとか、そういう願望があるわけではなく、常に気を張っていなければならないということです。だから、キャンプに住み込みで働くレンジャーたちには頭が下がります。彼らは、国立公園の中にずっといるわけですから、野生生物に対してだけでなく、もちろん密猟者に対しても、絶えず警戒を怠ることはできません。

Charlie Mayhew:

このような旅、探検とでも言いましょうか、「ウォーキング・ザ・ナイル」はあなたにとって初めての挑戦でしたが、その後、ヒマラヤや中央アメリカ、そしてアラビアでも行ったのですね。

Levison Wood:

はい。



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

Charlie Mayhew:

こういった旅は臆病な人には向いていませんよね?あなたはいつもリスクを計算しているように思うのですが。

Levison Wood:

もちろんです。

Charlie Mayhew:

死の願望はないとのことですが...

Levison Wood:

僕にとって、こういった旅、こういった探検は、僕が「グラウンドトゥールズ」と呼んでいることを少しでも皆さんにお見せし、場合によっては、その過程で神話を打ち破り、地域に関する人々の認識や固定概念に挑みたいという思いがすべてです。そして願わくは、そうすることで、悪いニュースに注目しがちな主流のメディアの中で頻繁に伝えられていることとは少し異なる視点を、人々にもたらしたいということです。

つまり、僕がしたいことは、しばしば否定的な報道がなされる場所で暮らす人々の物語を世に出すことです。それが価値ある貢献となればと思っています。旅の中で出会う人々と交流し、彼らの物語を語り、そうできれば、そうでなければおそらく知られることのなかった彼らの言い分を伝える機会をもたらすことができます。

Charlie Mayhew:

素晴らしいですね。

アフリカに関して言えば、我々が自然保護活動家として直面している大きな問題の一つが、生息地の喪失です。しかし、多くの注目が集まるのは、当然そうあるべきではありますが、野生生物の違法取引、そして象牙やサイの角、現在では悲しいことにライオンの体の一部を狙った密猟です。しかし実際のところ、おそらく最大の脅威は、生息地の喪失と我々人間が環境に及ぼす影響です。



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

あなたはそれを裏付ける多くの状況を目にしましたか?目にしたことはありますか?

Levison Wood:

ええ、それはもうたくさんあります。どういふことかと言うと、夫婦あたりの平均出生児数が依然として5~6人であることや、養う家族が多いことから必然的に引き起こされる波及効果、すなわち村の拡大が起きている地域社会であることから考えると、僕がアフリカを訪れるようになったこの20年間で、成長が必然であったことは容易に分かります。そうになると、耕地を拡大していかなければなりません。人間は森林を伐採し、保護区へも侵入します。僕自身もウガンダを歩き回っています。人々が食事を作るのに必要な木炭のためだけに多くの森林が焼き払われている事態は、非常に憂慮すべきです。

僕は酷く荒廃した広大な土地を歩くわけですが、焼き尽くされた跡はまさにこの世の終わりのようなありさまです。旅の途中で、サルを救出することになったのですが、なぜって、それは、ただただ痛ましい姿でした。これは全部人間のせいです。人は薪を必要としますし、木炭が必要だからです。そして、悲しいのは、その破壊が壊滅的な速度で続いているという事実です。

答えは簡単に出るものではありません。なぜなら、人間の人口増加について議論するとしても、何をもって阻止するのですか?西洋世界の人間がアフリカの人々に子供を持つなど言う権利などあるでしょうか?我々は産業革命を経験し、自分たちの森は大昔に切り倒しているじゃないですか。数千年前にはゾウもみな殺しています。

だから、とても難しい問題なのです。しかし、もし意味ある影響をもたらしたいと真剣に考えるなら、教育に向けた真の努力が必要です。僕は最近ゾウについての本を書いたのですが、その研究から導いた結論は、何かしらの犠牲は払わなければならないということです。どういう意味かと言うと、原生地帯を徹底して保護するということです。線引きにより巨大な国立公園をつくれるのであれば、それもいいでしょう。しかし、それはまた、一部のコミュニティが移住を余儀なくされることを意味します。地域レベルで厳しい決定をしていかなければならないでしょう。

Charlie Mayhew:

今お話の中で触れていたのが、最新の著書と昨年の遠征...



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

Levison Wood:

「ウォーキング・ウィズ・エレファント」。

Charlie Mayhew:

「ウォーキング・ウィズ・エレファント」ですね。その遠征について少し話していただけますか。

Levison Wood:

去年の夏に、ボツワナを歩いて縦断しました。テーマは、ゾウと一緒にオカバンゴ・デルタに向かって移動する、ということでした。ゾウの群れに完全に紛れて、ゾウたちと一緒に歩き、彼らのことを知る、まあ、そうですね、僕は知ることができたと思っていますが、本当に素晴らしい経験でした。

Charlie Mayhew:

ゾウたちもあなたのことを理解していましたか？

Levison Wood:

カルネイという素晴らしい現地ガイドがいました。ブッシュマンでした。彼の直感と自然との関係性は別物で、彼は周りの状況がすぐに分かるんです。どうやってって、つまり、自然が大好きだからです。遊動民として茂みの中で育ったからです。だから僕はとても安全な状況にいられました。今まで可能だと思っていたよりもずっとゾウに近づくことができました。正しい風向きを保ちさえすれば、大抵は大丈夫です。

アフリカでおそらく最も象徴的な種であるゾウにこれほど近づき、彼らの行動や社会構造、考え方や家族単位での機能の仕方、そして心理についても、少しではありますが、実際に彼らを知ることができたのは本当に素晴らしい経験でした。本当に素晴らしい動物です。

そして、未だに自然が保たれている場所でこれほど多くの時間を過ごせたことが、本当に光栄なことでした。オカバンゴ・デルタは現在も素晴らしい場所です。ボツワナには、野生のアフリカゾウのおよそ3分の1が生息しています。これ



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

Levison Wood:

は、ボツワナが自然保護の指針であり、このような自然の生息地を保護する能力を備えていたためです。

Charlie Mayhew:

は、ボツワナが自然保護の指針であり、このような自然の生息地を保護する能力を備えていたためです。

Levison Wood:

去年の夏に、ボツワナを歩いて縦断しました。テーマは、ゾウと一緒にオカバンゴ・デルタに向かって移動する、ということでした。ゾウの群れに完全に紛れて、ゾウたちと一緒に歩き、彼らのことを知る、まあ、そうですね、僕は知ることができたと思っていますが、本当に素晴らしい経験でした。

Charlie Mayhew:

ゾウたちもあなたのことを理解していましたか？

Levison Wood:

カルネイという素晴らしい現地ガイドがいました。ブッシュマンでした。彼の直感と自然との関係性は別物で、彼は周りの状況がすぐに分かるんです。どうやってって、つまり、自然が大好きだからです。遊牧民として茂みの中で育ったからです。だから僕はとても安全な状況にいられました。今まで可能だと思っていたよりもずっとゾウに近づくことができました。正しい風向きを保ちさえすれば、大抵は大丈夫です。

アフリカでおそらく最も象徴的な種であるゾウにこれほど近づき、彼らの行動や社会構造、考え方や家族単位での機能の仕方、そして心理についても、少しではありますが、実際に彼らを知ることができたのは本当に素晴らしい経験でした。本当に素晴らしい動物です。

そして、未だに自然が保たれている場所でこれほど多くの時間を過ごせたことが、本当に光栄なことでした。オカバンゴ・デルタは現在も素晴らしい場所です。ボツワナには、野生のアフリカゾウのおよそ3分の1が生息しています。これ



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

は、ボツワナが自然保護の指針であり、このような自然の生息地を保護する能力を備えていたためです。

本当に素晴らしい旅でしたよ。約600キロだったと思います。僕はこれをきっかけに、旅のことだけでなく、ゾウについても本を書いてみたいと思うようになりました。そして、『ザ・ラスト・ジャイアンツ』という本を書きました。副題は『アフリカゾウの盛衰』です。少し悲しい響きのタイトルだと思います。しかし、僕の生涯の間だけでも、ゾウの生息数が100万頭から42万頭にまで減少したということもまた事実なのです。もしかしたら、もっと少ないかもしれません。

Charlie Mayhew:

おそらくもっと少ないでしょう。どこを取るかによりますね…

Levison Wood:

森林ですね…、ええ。

Charlie Mayhew:

サバンナゾウは約35万頭います。あなたの言うとおり、ボツワナには…

Levison Wood:

12万頭います。なので、何か対策を講じなければなりません。僕は自分の研究結果について本を書こうと思いました。初期の絶滅と人間が環境に及ぼす影響を先史時代にまで遡り、密猟やトロフィーハンティング、そして先程お話したことなどを取り巻く現代の課題まですべてにわたり検証しましたが、結局のところ、問題の核心は生息地の喪失です。

Charlie Mayhew:

そのとおりですね。我々は今、興味深い時代に生きています。気候変動、環境、自然保護…。これらの問題に対する認識は、おそらく依然に比べてはるかに高まっているでしょう。大切なのは、これらの問題をサイロ化した状態ではなく、そ



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

の相互関連性を検証していかなければならないということです。我々はそれを、今年9月に開催される生物多様性に関する会議と、その後ここ英国で開催される気候変動会議で見られることを心から願ってやみません。

ゾウの話題に戻りましょう。ある植物や樹木の種は、ゾウの消化器官を通過した後にしか発芽しないと言われています。

Levison Wood:

そうですね。

Charlie Mayhew:

ゾウは我々の生態系にとって非常に重要なエンジニアです。生態系が正常に機能する限り、生態系自体が素晴らしい炭素吸収源の役目を果たします。

だからこう考えていかなければいけません…

Levison Wood:

ゾウは要の種である、と。

Charlie Mayhew:

そのとおり。

こういった認識がこれからも高まってほしいですね。

Levison Wood:

僕は今、リワイルディング、つまり再野生化という考えに強く関心を持っています。北米のイエローストーン国立公園などでこのような素晴らしい取組みを見てきました。少数のオオカミを再導入するという単純な処置によってシカの数が増え、さらに草や土など様々なものにも波及効果が及びます。文字どおり、川の流れを変えることができるのです。



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

アフリカでは、このような波及効果はさらにいっそう大きくなります。ゾウを失えば、環境に甚大な影響が及びます。

ゾウが多すぎる場合も同じことが言えます。ボツワナをはじめとする特定の地域では、ゾウが多すぎると不平が出ていますが、これはゾウが1か所に集まるためです。そのため、特定のエリアに通常よりも大きな影響が出てしまうのです。

そのため、僕たちが注力すべきは、十分な空間を設けて、自然のなすままに任せるということです。

Charlie Mayhew:

そして、ゾウは非常に賢い動物として知られています。ボツワナにそれほど多くのゾウが生息している理由は、その保護プログラムの成果だけではなく、周辺国からゾウが...

Levison Wood:

ええ、移動してきたからとも言われています。

Charlie Mayhew:

密猟で苦しめられたゾウたちが、ボツワナの安全な場所へ逃げてきた、と。

Levison Wood:

本当かどうかは分かりませんが、こんな話を聞いたことがあります。南スーダンには多くのゾウがいましたが、内戦が起きるとゾウたちはウガンダなどの地域に逃げたといえます。しかし、内戦が終わってからわずか1週間後、ゾウたちが戻ってきたらしいのです。

驚きますよね。どのようにしてかはよく分かりませんが、低周波や足の感覚受容器を使って、ゾウは遠く離れていてもコミュニケーションをとることができます。最大20マイル(約32キロメートル)離れた場所でも情報伝達ができると言う科学者もいます。これほど遠く離れた場所で文字通り互いに話ことができ、危険や密猟者などのメッセージを伝え合うことができるなんて本当に驚かされます。



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

そのように考えると、極めて知能の高い種の保護は、突き詰めると、僕たち人間にかかっているのだということを頭に入れておかなければなりませんね。

Charlie Mayhew:

アフリカ以外では、ヒマラヤ、アラビア、中央アメリカにも行っていますが、これらの地域でも自然保護と環境の点で同様の問題があるのでしょうか？

Levison Wood:

問題は、結局どこへ行っても同じで、人間が環境に及ぼす影響なのだと思います。

僕が生まれた頃の世界の人口は45億人でした。現在は77億人です。この先新たな問題が出現しても、このことが結局、気候変動を取り巻く「すべて」なのです。気候変動はそれ自体が原因ではなく、人間が環境に及ぼす影響を原因とします。海にあふれるプラスチックも、生息地の喪失と密猟に関しても同じです。すべては、人間の数が急増しているのに、地球はこれ以上大きくならないことが原因です。

だからといって、成長そのものが問題だと言っているのではありません。それがいかに持続可能であるかということであり、ここでの問題は消費です。今持っている資源が適切に管理され分散されているかが重要なのです。

そして残念なことに、消費水準に関する統計を見ると、米国や西欧諸国などの国々では、サプライチェーンや食事内容から、二酸化炭素排出量のはるかに多いことが分かります。僕たちが子供を2人しか持たなくても、環境に及ぼす影響は互角なのです。

しかし今後は、アフリカなどの地域で急激な増加が起きるでしょう。

Charlie Mayhew:

アフリカの人口は倍増する見通しで、2050年までに最大24億人になると予測されています。



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

Levison Wood:

国連の予測によると、世界の人口は約110億人に達するまで増加し続けるとされています。現在77億人なので、大幅な人口増加がまだ起きるといことです。教育、貧困、富の分配など、それらすべてのことが世界中で規制されるようになり、人々が子供の数を2人に制限する必要性を感じるようになるまでです。人々が子供を多く持つ理由は、労働力が必要なためと、安心感を得るためでもあります。また、幼い子供が亡くなることもほとんどないからでしょう。

医学と技術の進歩に伴い、人間の寿命は延びています。ありがたいことに、子供の死亡率も昔のように高くありません。人々の考え方がこの事実を追いつくまで、今後80年間で世界人口がさらに30億から40億人増えるだろうということを、僕たちはまだ心に留めておく必要があるでしょう。

では、ゾウなどの種は絶滅する運命にあるということでしょうか？ そうでないことを望みます。しかし、ゾウを守りたいのならば、今すぐ行動を起こさなければなりません。

Charlie Mayhew:

私はいつも、「自然保護活動家になるには、楽観主義者でなければならない」と言っています。

私は幸いなことに、Tuskがアフリカ大陸全土にわたって出資する数多くのプロジェクトを見に行くことができます。ここでは、素晴らしい努力や真の成功と功績に出会うことができます。その一部を、『タスク コンサベーション アワード』で称える取組みも行っています。あなたも参加したことがありますよね。

あなたはまだ楽観的な気持ちを抱くことができますか？状況を好転させることができると思いますか？

Levison Wood:

そうですね、実情と数字を見ると、楽観的でいるのは正直難しいですね。しかし、あなたは現場へ行き、そこで頑張っている人たちと実際に話しています。僕はボツワナで非常に興味深いと思ったことがありました。多くの男性が、ゾウが村に来て作物を踏み荒らし、1年間の農作物の取り分を食べてしまうなどと不平を言っていたのです。「ゾウを殺しに行く」と言っている彼らに共感を抱かずにはいられませんでした。



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

カルネイはこのようにも言っていました。「もしそれでも君がすべてのゾウを救うべきだと思うなら、ゾウを英国に連れ帰って、ハイド・パークで放したらいいじゃないか、どう思う?」って。もっともな指摘です。

一方で、多くの女性とも話しましたが、彼女たちの多くは反対のことを言っていました。彼女たちは、観光資源という観点から、ゾウの恩恵をある程度理解していました。現に、1人の素晴らしい女性に会いました。彼女は珍しい伝統的なバスケットを使って沼で魚を釣るバスケットフィッシャーでした。彼女は、自分の父親がゾウに殺されたことを話してくれました。

僕は聞きました。「どう感じていますか?」と。すると彼女は、自分へ言い聞かせるようにこう言いました。「彼らの場所にいるのは私たちです。ここはゾウの住処です。私たちは訪問者ですから」

Charlie Mayhew:

興味深いですね。

Levison Wood:

人々は…そこには敬意があります。しかし、やはり最終的には、とりわけ教育と女性の地位向上、そしてその声を広く知らせることにかかっているのだと思います。

Charlie Mayhew:

間違いありません。

Tuskの活動の多くは、これら地域社会と密接に関連しており、考え方を考える上で女性が極めて重要な役割を担うと見えます。

Levison Wood:

確かにそうですね。それと、もし教育を通じて楽観と希望を生み出すことができるなら、仕事に就くこと、つまり12歳で学校を辞めて、14歳とか15歳で結婚して妊娠するのではなく、もしもっと長い期間学校で学ぶことを認められ、仕事に就く機会を得ること



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

ができるなら、おそらく24歳か25歳までは結婚せず、子供も5人や10人ではなく、3人しか産まないでしょう。それが正しい方向への第一歩だと思います。

Charlie Mayhew:

そのとおりです。

これまでに行った様々な探検、特にアフリカで行ったものの中で、現地の人々はあなたを温かく迎え入れ、助けとなってくれましたか?あなたのことを頭がおかしいと思っていませんでしたか?

Levison Wood:

ええ、初めは「車をどこに置いてきたんだ?壊れたのか?」と聞かれますが、その後は信じられないほど歓迎してくれます。アフリカ中のコミュニティから歓迎されました。そのもてなしの心と寛大さには驚かされます。物質的に与えるものがそれほどあるわけではない場所なのに、最後の一羽となった鶏でも何でも喜んで料理してくれます。

そのため、旅の中で人々を訪れると謙虚な気持ちになります。先ほどもお話ししましたが、僕にとって彼らの物語を伝えることはとても重要なことです。本当に興味深い、人の心を奪うような物語があるからです。たとえば、ナイル川を歩いていたとき、これはアフリカの生命の起源である偉大なる川のはずなのに、僕は歩いてきた長さについて言及すると、彼らはこう言うのです。「ああ、それにはどのくらいかかるんだ?1週間か?」って。南スーダンやウガンダの農村部などでは、どこから来たとかどこへ行くとかいうことについて、まったく理解してもらえません。

事実、話の中でたとえば「エジプトまで歩いている」と言っても、ほとんどの人は何のことか分かりません。しかし、200マイル(約322キロメートル)離れたカンパラまで歩いていると言ったら、彼らはひどく驚いて、「カンパラまでなんて歩くことは無理だ。なぜ車で行かないんだ?」と言うのです。

本当に楽しい経験でした。彼らはほんの好奇心から、「今日一緒に歩いてもいいか?」と言ってくれることもよくありました。

Charlie Mayhew:

それも聞きたいと思っていました。



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

Levison Wood:

一緒に歩くことですか

Charlie Mayhew:

あなたと一緒に歩いてくれる人はいましたか?

Levison Wood:

ええ、もちろんいました。中には、ポーターになりたいと言って、バッグを運ぶのを手伝ってくれる人もいました。しかし、多くの人は、「今日は何もすることがないから、一緒に付いて行っていいか?」と聞いてきました。こんな会話を交わしながら旅ができて、本当に楽しい経験でした。

Charlie Mayhew:

きっと、あなたは素晴らしい人たちに出会ったのでしょう。とりわけあなたの目を引いた人物はいましたか?

Levison Wood:

ナイル川遠征の前半でガイドを務めてくれた、ポストン ドールという男性ですね。元はコンゴ出身ですが、難民としてウガンダに住んでおり、約5ヶ月半同行してくれました。

Charlie Mayhew:

どうやって彼を見つけたのですか?

Levison Wood:

東アフリカには以前行ったことがありました。ご存知とは思いますが、一種のネットワーク構築のようなもので、周囲に尋ねて回りました。「ガイドをしてくれる人を探してるんだ。可能性としては1年間、良い人を知ってるかい?」って。そしたら、どこへ行ってもポストンの名が挙がりました。どういうわけか、彼らは「歩きたいと言う奴なんてポストンくらいしかない」と言うのです。事実、彼はそう言いました。冒険が好きで、挑戦したいと言ってくれ



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

ました。彼は評判通り、とても面白い男でした。実は、ユーモアはこの種の遠征に同行する中でとても大切な要素です。僕らが必要とするのは、タフで、自分で自分の面倒を見ることができ、身体的能力があり、文句を言わない人。そして何より、ユーモアを持っている人です。なぜなら、お互いを励まし続けなければなりませんし、ユーモアだけが困難を乗り切るための力となるからです。ポストンはすべての要件をクリアしていました。

Charlie Mayhew:

そして、今も連絡は取り合ってるわけですね。

Levison Wood:

もちろんです。僕たちはいつも連絡を取り合っています。会いにも行きましたよ。彼は今、オランダに住んでいます。アムステルダムに会いに行くつもりです。

Charlie Mayhew:

確かに、ユーモアのセンスは絶対に重要です。しかし、長い沈黙の時間もあったのではないのでしょうか。お互いに一緒に歩きたくないと思ったときも実際にはありましたか?20歩以上離れて歩くなど?

Levison Wood:

いえ、仲が悪くなるようなことは一度もありませんでした。これは素晴らしいことだと思います。僕が思うに、僕たちはお互いに対しても、また一緒にスタートした仲間に対しても満足していたのだと思います。確かに、長い沈黙もありましたが、それはそれで良いものですよ。僕らは気の合う仲間でした。本当に良かったです。

Charlie Mayhew:

「ウォーキング・ザ・ナイル」では、ウガンダ北部、スーダン、そしてさらに北へ北上して行きました。特にスーダン周辺だと思いますが、そういった地域で反政府活動が起きている中、非常に危険な状況になりかねない瞬間はありましたか?



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

Levison Wood:

南スーダンですね。僕が南スーダンに着いたのは2014年の3月でした。なので、内戦は……。2013年の12月に事態が深刻化したため、紛争から逃れようとする難民の流れに逆らって進みました。ええ、辛かったですね。ナイル地方のボルなどの町は戦闘によって文字通り疲弊しきっており、それは悲劇的でした。残念ながら、その悲劇は今もまだ終わってはいません。

Charlie Mayhew:

私はその辺りの世界には行ったことがないのですが、これらの地域では北へ進むにつれて、野生生物の数が徐々に少なくなっていくのではないですか？

Levison Wood:

南スーダンには、かつて多くの野生生物が生息していました。確か今でも世界で最も大きな……

Charlie Mayhew:

コーブ

Levison Wood:

そうです、コーブの移動があります。白い耳を持つコーブです。ナイル川とエチオピアの間には広大な土地が広がっています。まさに未開の地です。しかし、内戦が勃発して軍隊が奥地に追いつめられると、彼らはもちろん動物を殺さなければ生き延びることができません。悲しいことですが、僕たちの遠征中も兵士が同行しており、彼らは実際には僕たちの護衛なのですが、アンテロープを見つけるたびに、AK-47という自動小銃で撃ち殺すのです。それが……。それが彼らのやり方です。そうやって食物を得るわけです。

マーチソン フォールズ国立公園でも、同じことが70年代から80年代にかけて起きました。当時、結成されたウガンダの武装勢力である「神の抵抗軍」によって、公園内の多くの動物が殺されたのです。コンゴなどでも同じことが起こっています。紛争が絶えるまで、内戦が終わるまで、そして貧困がなくなるまで、これが、野生動物が直面している最大の根本的課題の一つだという事実はとても残念です。



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

forevermark.com

Charlie Mayhew:

アフリカ大陸だけでなく、すべての大陸でのあなたの経験から、ビジネスセクターの重要性をどう考えますか?企業ブランドがこういった領域で役割を果たし、Tuskなどの慈善団体を支援することについては?

Charlie Mayhew:

今日はお時間をいただき、ありがとうございました。

Levison Wood:

ありがとうございました。



FOREVERMARK

ダイヤモンドは永遠の輝き

[forevermark.com](https://www.forevermark.com)